

源氏物語の六条御息所

— 光源氏の「いとほし」「情」の心理を手がかりに —

金玉京*

(e-mail : itsoon@hanmail.net)

目次

- 一 はじめに
 - 二 「いとほし」とその心理的背景
 - 三 「情」を意識する関係
 - 四 「情」を知る御息所
 - 五 おわりに
-
-

一 はじめに

六条御息所に関する多くの研究は、文学作品の素材としては珍しいもののけという現象やそれに関わる御息所¹⁾の心理の把握に主な焦点があてられている。それほど御息所という人物を考えると、もののけという問題は大きく意味を持つものである。ただ、物語の中での御息所の意味を理解するためには、それだけではなく、別の多様な角度からの接近も必要であり、その点では御息所に関する研究²⁾はいまだ十分とはいえないように思われる。

御息所は、源氏と関わる数多くの女性の中でも、身分や教養、容姿にすぐれた存在でありながら、一方では、もののけとなるおぞましい存在として描かれている。こうして矛盾した

* 韓南大学校 講師 平安文学専攻

1) 以下、便宜上、六条御息所を御息所と表記

2) 野村精一「源氏物語の人間像・I 六条御息所」（『源氏物語の創造』桜楓社・1969）、鈴木日出男「車争い前後の六条御息所—『源氏物語』表言論覚書—」（成城文芸91・1980）、熊谷義隆「六条御息所の生霊について—その発生を中心に—」（『山形女子短期大学紀要』18・1986）、藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉』（笠間書院・1995）など。

ように見える御息所に対し、源氏は常に「いとほし」と同情の眼差しを向け、その対応においては「情」を欠かせまいと配慮する態度を見せている。実は源氏のこうした心理や姿勢は、御息所の置かれた現実を克明に表すものでもあった。物語では、このような源氏の御息所への心のあり方や対応の仕方を描くことによって、何を語ろうとしたのか。

本稿は、源氏の御息所に対する心理、とりわけ「いとほし」と「情」という語によって浮き彫りになってくる御息所の物語での役割について考える。まず、御息所を「いとほし」く思う源氏の心理的背景を考えることから論を進めたい。

二 「いとほし」とその心理的背景

「いとほし」という語は、「弱い者、劣った者を見て、辛く目をそむけたい気持になるのが原義」で、「自分のことについては、困ると思う意。相手に対しては「気の毒」から「かわいそう」の気持に変わり、さらに「かわいい」と思う心を表すに至る³⁾」という。こうした同情や憐憫を言い表す語には、「いとほし」の他にも「心苦し」という語がある。鈴木日出男氏は、この二つの語は、同じく弱い相手、劣った相手に対する同情・憐憫を表す点では共通しているが、「「いとほし」は対象の側に表現の主眼が置かれるのに対し、「心苦し」はその対象を受け止める主体の側に主眼が置かれる⁴⁾」と、その違いについて述べている。そのためなのか、「心苦し」が用いられたときには、発話者によるその対象への切実さなどが強く感じられる。一方、「いとほし」には軽蔑のこもったときにも用いられる場合があるようで、死の場面では「いとほし」が用いられる例はない⁵⁾。実は、本稿で取り上げる六条御息所は、物語の中でこの同情する対象の側に焦点を当てた「いとほし」という語が、最も多く用いられている女性の一人である⁶⁾。

3) 大野晋／佐竹昭広／前田金五郎編（『岩波古語辞典』1974、p. 118）。また、大野晋は、この「いとほし」の起りが「いとふ」と同じだと考え、「「いとほし」は「いとふ」様な気持になること。つまり、まともに見るに耐えず、相手に対しても、自分に対しても、身を閉じたい気持になる」ことを「いとほし」の本来の意味とした。それでいまの「いとほし」の意味は、「「いとほし」から「いとをし」「いとをし」「いとし」という変化のうちに、目をそむけたい気持から、しみじみとした恋慕の気持へと移っていった」と説明している。（「いとほし」（『日本語の年輪』新潮文庫・1969））p. 96

4) 鈴木日出男「心情語「いとほし」「心苦し」」（『源氏物語の文章表現』1998・至文堂）p. 252

5) 池田節子「いとほし」（『王朝語辞典』東京大学出版会・2001）p. 44

6) 勿論、この物語では、「いとほし」という語が数多く用いられているため、御息所に限った表現ではなく、源氏と関わる女性の中では、この御息所（16例）の他にも、末摘花（16例）と女三宮（14例）にもっとも多く使われている。一方、花散里のような女性には1例も用いられていない。花散里は、女性としては源氏の愛情を持ってもらうことはなかったが、夕霧や玉鬘の養母として活躍するなど源氏の信頼が厚かったため、社会的には高い位置を占めていたといえる。ということが、「いとほし」さを感じさせる存在としては描いていなかったであろう。

晩年の源氏は、紫上を相手にして過去の女性関係を語り、その中で葵上と御息所について、次のようなことを言っている。

大将の母君を、幼かりしほどに見そめて、やむごとくえ避らぬ筋には思ひしを、常に仲よからず、隔てある心地してやみにしこそ、今思へばいとほしく悔しくもあれ、また、わが過ちにのみもあらざりけりなど、心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしく重りかにて、そのことの飽かぬかなとおぼゆることもなかりき。ただ、いとあまり乱れたるところなく、すすしく、すこしきかしとやいふべかりけむと思ふには頼もしく、見るにはわづらはしかりし人さまになむ。

中宮の御母御息所なむ、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でられるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。恨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかさはむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへしがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我罪ある心地してやみにし慰めに、中宮を、かく、さるべき御契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なほされぬらん。 (若菜下・208～210) 7)

源氏にとって葵上と御息所は、最後まで打ち解けられないまま終わってしまった女性であり、そうした二人に対して源氏は「いとほしさ」を感じている。が、その感情には違ったものが認められる。葵上に対しては「今思へば」とあるように、それまでの源氏は葵上を「いとほし」と思ったことがない。実際、物語の中でもこの例の他、源氏が葵上を「いとほし」と思ったことは一回もない。源氏は晩年の今になってはじめて、葵上を「いとほし」き対象として考えているが、それはおそらく夕霧という嬰兒を残したままその短き生涯を終えたことへの痛ましが込み上げてきたからであろう。ただ、二人の関係における不和は、「わが過ちのみもあらざりけり」と、源氏は自らの処世の不十分さにだけあるとは思っていない。

一方、御息所との関係において、源氏は御息所に対する自分のあり方は恨まれて当然だと思ひ、そのことで御息所が「長く思ひつめて深く怨ぜられし」ことを「いと苦しく」思ったといっている。そして、御息所が自分との関係によって不名誉な浮名を立てられ、世間に軽んじられたと嘆いて「いみじく思ひしめたまへりし」ことが「いとほしく」思われたという。これは、源氏と関わったことそのものが問題ではなく、二人の関係が世間に知られてしまったにも関わらず、源氏がしかるべき扱いをしてくれないことが、元東宮妃で誇り高き御息所には致命的な不名誉につながったことをいう。こうして源氏は御息所の体面を傷付けた自分の行為に対して、「我罪ある心地してやみにし」と責任感を覚えている。御息所の娘を養女にし

7) 本文の引用ページ数は、新編古典文学全集（『源氏物語』小学館・1995）による。以下同様。

て、中宮にさせたのもその罪滅ぼしの一つであったと、源氏はいつている。

つまり、源氏は御息所の自分に対する恨みを当然なこととして認めているが、それは自分との噂が立てられたまま、その後正式な妻にするなどの何らかの措置がなされていなかったからである。また、そうした源氏との関係による不名誉を強く意識する御息所のあり方を、源氏は「思ひしめたまへりし」と表現しているが、この「思ひしむ」という語は、源氏物語で18例見られ、その中で、下二段活用をするのは、この場面と源氏の藤壺への執心深さを示す2例のみである⁸⁾。相手やある事柄を深く心にしみこませて悩んだり苦しんだりすることをいうが、それだけに、御息所にとって自己の体面維持というものが、どれほど切実な問題で重要な意味を持つものであったのかが知られる。また、そのことを源氏も十分理解していたからこそ、これほど鮮明にあのときの御息所の様子が忘れられなかったのであり、御息所のように源氏は「いとほし」さを感じさせられていたのであろう。

いったい、源氏との関係における不名誉が、御息所をあれほど深く思い詰めさせていた理由は何か。またそのことが源氏に強く意識され、「いとほし」く思う、その心理的根拠となるものは何か。

物語では、源氏と御息所との関係が描かれる最初の段階から、すでに源氏が御息所を「いとほしき」存在として認識していたことを、次のように記している。

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ねらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたり⁹⁾にもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しいことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すまに、あまり心深く、見る人も苦しい御ありさまをすこし取り捨てばやと思ひくらべられたまひける。(夕顔・163)

ここで源氏は、現在自分と関わっている女性の中でも、御息所を「いとほしき筋」としては第一に思っている。御息所は源氏の妻として社会的に認められている関係ではなく、源氏の通い所の相手の中で、最も気にかかる存在であった。源氏は、中々なびいてこない御息所を口説き落とすために、初めの内は熱心に求愛していたが、御息所を得たいまやうって変ってその姿勢に熱情というものも薄れ、何かにつけて遠慮がちになってしまった。そのような自分の態度の変化に、源氏は負い目を感じ、自分の訪れを待ちながら思いなやむ御息所を「いとほし」と思うのである。こうした源氏のあり方については、語り手によって、「六

8) 「気高う恥づかしげなるさまなども、さらにこと人とも思ひわきかたきを、なほ、限りなく昔より思ひしめきこえてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたくひなくおぼえたまふに、(賢木・110)」、「参りたまふも、今はつつまし薄らぎて、御みづから聞こえたまふをりもありけり。思ひしめてしことは、さらに御心に離れねど、ましてあるまじきことなりかし。(賢木・134)」

9) 「六条わたり」の女性を、六条御息所とすることは、すでに『河海抄』を初めとする古来諸注釈書によって言われてきて、異論はないであろう。また、この御息所に対する源氏の思いのすぐ後に、源氏の夢に女が現れ、夕顔は物の怪に取り殺されることになる。その夢の女が御息所であるかどうかはまだ議論されている。

糸わたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。(夕顔・147)」と語られていた。御息所への源氏の対応は語り手によって同情心を呼び起こされるものであった。源氏が「いかに思ひ乱れたまふらん」と、御息所の意中を汲み取ってみるのも、また、「恨みられんに苦しうことわりなり」と自分の態度を恨まれて当然だと思ふのも、そのためである。そうした心の負担が御息所を通い所の女性の中でも「いとほしき筋」として第一に思ふ理由なのである。

勿論、こうした源氏の御息所への心情が、御息所の高貴な身分と関係していることはいうまでもない。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮にみたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。院にも、かかることなむと聞こしめして、「故宮のいとやむごとく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、わが御心にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなきを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。(葵・18)

この桐壺院の訓戒からもわかるように、源氏が御息所を大事にし、尊重すべき根拠の一つには、御息所の皇太子の妃として時勢に合って栄えた過去があったという点にある。御息所の高貴な身分に相応しくない源氏の待遇が「いとほしき」をさそいだす理由なのであり、父桐壺院は、その点について源氏を呼び寄せてわざわざ注意している。

また源氏も、「わが御心にもげにと思ひ知らるれば」とあるように、それは十分わかっている、御息所を考える際にもその点によく気にかかるころであった。たとえば、源氏は葵上に取り付いた御息所の生霊に遭遇して、男女関係すべてを厭わしく思い、出家への志を抱いたときでさえ、「かき絶え音なうきこえざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべきこと (葵 51)」と、自分からの連絡が途絶えた場合の御息所の心を思いやり、さらにそれが御息所の名誉に傷をつけることに繋がるのではないかと思ひ悩んだりする。すなわち、源氏の御息所への憐憫の情は、御息所の社会における体面損傷を意識して引き起こされるものでもあった。しかし、源氏の御息所に対するこうした感情は、「まだあらはれてわざとてなしきこえたまはず (葵・19)」とあるように、御息所に世間が認める妻としての地位を与えようとする積極的な意味を持つものとしては働いていない。それを御息所は「深うもあらぬ御心のほど」として嘆くのである。この御息所の嘆きの背後には、源氏の妻として世間に認められたいという御息所

の強い願望と同時にその期待が叶えられないことに対する失望を読み取ることができる。

なお、車の所争い後、源氏は御息所が祈祷のために野宮から場所を移したと聞き、「いかなる御心地にかと、いとほし思し起こして渡りたまへり（葵 33）」とあるが、気分のすぐれない御息所を気の毒に思う源氏の心とはうらはらに、源氏の見舞いは「思し起こして」と、進まない気持を奮い立たせなければ実行できないものであった。つまり、源氏の御息所に対する「いとほし」という感情を発動させる背後には、御息所の身分高さを意識する姿勢がある。しかし、それは御息所を正式な妻としようとする積極的な意味を持つものではなかったのである。

この御息所の他にも、物語では源氏の末摘花や女三宮との関係において、よく「いとほし」という感情を抱いていたことを描く。末摘花の場合を見ると、源氏は末摘花の実態を知らず結ばれるが、何か釈然としない気持のまま帰った後にも、「かしこには文をだにいとほしく思し出て（末摘花・286）」夕刻になってではあるが、後朝の文を遣わしたり、末摘花の平凡ではない容貌にびっくりしては「いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ（末摘花・294）」のである。他にも末摘花の愚鈍さや生活上の苦しさに対しても絶えず同情の眼差しを向けている。源氏が愛情というものはややかけ離れていた末摘花を、「いとほし」く思っていた理由の一つには、末摘花の悲惨な生活環境や有り様に対する憐憫だけでなく、やはり末摘花のもととは親王の娘という高い素姓に生まれながらも、それに似つかわしくないあり方で暮していることへの同情にある。

また、女三宮の場合では、源氏による「いとほし」という感情が、「内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、（若菜下・177）」とか、「院にも、内裏にも、琴はさりとて習はしきこゆらんとしたまふと聞かぐいとほしく、（若菜下・204）」などと、よく宮の異腹兄弟の今上帝や父の朱雀院への思惑と連動して用いられている。女三宮は源氏の正妻なので、源氏の宮に対する扱い方には、常に世間の関心が向けられていて、それを源氏も意識せざるを得なかったのである。

このように、源氏による「いとほし」は、相手の置かれた状況や境遇によって、相手の身分地位を意識する態度から呼び起こされているといえるが、とりわけ御息所の場合には、源氏は彼女の元東宮妃であった社会的な地位を強く意識した点に基因している。それは、御息所がどれだけ、自らの社会的な位置を重んじていた女性であったのかを反証するものでもある。

三 「情」を意識する関係

さて、御息所に対する源氏の心情には、この「いとほし」という語とともに、「情」という語が繰り返され、源氏と御息所の関係の特徴づけるものとして注意される。いったい、源氏

と御息所の関係における「情」とは如何なる意味をもたらすものであろうか。

以下、「情」という語で浮かび上がってくる御息所の意味について考えたい。

源氏は、葵上と御息所との間に起きた賀茂祭の禊の車の所争い事件の一部始終を従者に聞き知り、二人について次のように思う。

大将の君、かの御車の所争ひをまねびきこゆる人ありければ、いといとほしうしと思して、なほ、あたら、重りかにおはする人の、ものに情おくれ、すすくしきところつきたまへるあまりに、みづからはさしも思さざりけども、かかるなからひは、情かはすべきものとも思いたらぬ御掟に従ひて、次々よからぬ人のせさせたるならむかし、御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん、といとほしく参でたまへりけれど、齋宮のまだ本の宮におはしませば、榊の憚りにことつけて、心やすくも対面したまはず。ことわりとは思しながら、「なぞや。かくかたみにそばそばしからでおはせかし」と、うちつぶやかれたまふ。
(葵・26～27)

源氏と御息所は正式に結婚した間柄ではないので、御息所は正妻の葵上の地位を脅かすような存在ではない。にもかかわらず、「絵に描きたるものの姫君（若紫 226）」のような葵上は、人間的な情味に欠け、御息所に対しても思いやりというものをもっていない。一方の御息所は、源氏も気後れがするほどの思慮深さをもって、奥ゆかしく高い教養を身につけて常に優雅に振る舞う女性である。しかるに、思いがけない車の所争いに巻き込まれ、どれほど落胆し、高尚なあり方が傷付けられたのだろうか、源氏は御息所を同情する。

ここで源氏は、葵上と御息所の関係を「情かはすべきもの」とし、葵上の「情」に後れている態度に舌打している。「情」とは、一概に説明できるものではなく、その意味は多岐に渡って解釈できるが、とりわけ源氏物語における「情」の特徴は、「親子、兄弟の間では使われず、第一夫人と愛人とが仲よく付き合うこと」をいう場合によく用いられ、多く「よそながらの心づかい」をいう¹⁰⁾。源氏のいう「情」も、葵上と御息所の心の底にあるはずの憎悪を抑えて、表面的には思いやりを見せ合うことを意味する。つまり、夫人たちとの間の安穏な生活を保つためには、互いに「情」ある心づかいが求められるが、葵上にはそうした配慮心というものが足りない。

この物語では、第一夫人が下位にある愛人に見せ合うべき徳目としての「情」に欠けていることを指摘する例がいくつかある。例えば、若紫が父の兵部卿宮に引き取られることを案じられる理由の一つには、兵部卿宮の北の方にいじめられた若紫の母の扱われ方にある。それを少納言は「故姫君のいと情なくうきものに思ひきこえたまへりし（若紫・241）」といている。また、頭中将は、夕顔の失踪の理由として、「この見たまふるわたりより、情な

10) 大野晋「なげけ」（『日本語の水脈』新潮文庫・平成14年）p. 37

くうたてあること（筈木・82）」をされたからであるとする。物語では第一夫人と愛人との間は「情」を交わすべきものとしていながらも、そうしたあり方は現実的に実現しにくいものとして描いている。

当該の記事で源氏は、車の所争いの事件による事態を、葵上側の乱暴な行為そのものではなく、「情」のない葵上の心のあり方にあると把握している。これは御息所のこの事件による深い傷が、葵上から受けた軽蔑の行為の奥にある自分を軽視する心に基因しているという理解ともつながっている¹¹⁾。つまり、ここでは、単に御息所に無礼な行為をした配慮心のない葵上側のあり方を非難するためという表面的な意味合いよりも、元東宮妃という昔の威勢を失って、源氏の妻としては葵上より劣位に置かれ、誰の心にも「いとほし」く受け止められるに十分であった今の御息所の現実を浮き彫りにしているところに主眼が置かれているといえるのではあるまいか。

さて、このように源氏は夫人たちの間における「情」を重視する一方、御息所との関係において自分の行動を示すにも「情」というものを意識的に喚起させている。

常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。さりとて、かき絶え音なうきこえざらむもいとほしく、人の御名の朽ちぬべきことを思し乱る。過ぎにし人は、とてもかくても、さるべきにこそはものしたまひけめ、何にさることをさださだときげやかに見聞きけむと悔しきは、わが御心ながらなほえ思しなほすまじきなめりかし。齋宮の御浄まはりもわづらはしくやなど、久しう思ひわづらへど、わざとある御返りなくは情なくやとて、（葵・51～52）

これは、葵上の死後、その見舞いに手紙を送った御息所に対する源氏の心情を記したものである。源氏は御息所の優れた見舞い文の書き振りに感心していながらも、そのさりげない文面につらさを覚えて返事をすべきかどうかで思案に暮れている。というのも、葵上を取り殺した生霊が御息所当の本人であったことを、源氏は我が目の前で確認したからである。それを無視してなかったことのように対応するには、あまりにも生き生きた記憶として残っている。また、御息所は齋宮の潔斎のために野宮という神聖な場所において、そこを訪ねるのも気がおける。どうすべきかすぐに判断しかねて、あれこれと時間をかけて思い悩んでいるが、わざわざ手紙を送ってきたことを考えると、返事がないのも思いやりのない冷たい対応だとして返事だけはする。この進まない気を奮いたたせたのは、他ならぬ「情」のためであった。世間の目を気にする関係、形式的ではあるが、相手を配慮した態度が「情」ある態

11) 増田繁夫氏は、御覧見物の場で受けた侮辱に対する御息所の心理を深く分析なさった後、御息所は「御覧見物の場で受けた侮辱の具体的なそのでき事よりも、人々の前でそうした恥辱を加えようとした相手方の心のあり方を深く恨む」という心理の構造を持っていて、この物語の顕著な傾向として「人の行為よりも言葉を、自分に被害をもたらしたでき事よりも、そのでき事に関わる人の心理を重視する点」（『葵巻の六条御息所』（『人物造型からみた源氏物語』至文堂・1998）p. 24）を指摘している。

度である。このように、源氏は御息所に対して「情」というものを意識している。

御息所の伊勢ゆきが決まった後、その訪問に際した時にも、源氏は御息所に対して「情」を欠かせまいとする気持を起こしていた。

もとの殿にはあからさまに渡りたまふをりあれど、いたう忍びたまへば、大将殿え知りたまはず。たはやすく御心にまかせて参でたまふべき御住み処にはたあらねば、おぼつかなくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御なやみにはあらで例ならず時々なやませたまへば、いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく、人聞き情けなくやと思しおこして、野宮に参でたまふ。九月七日ばかりなれば、むげに今日明日と思すに、女方も心あわたしけれど、立ちながらと、たびたび御消息ありければ、いでやとは思しわづらひながら、いとあまり埋もれいたきを、物越しばかりの対面はと、人知れず待ちきこえたまひけり。(賢木・84)

源氏は、野宮という神聖な地への気づかみや父の桐壺院の病気への気がかりをいいわけにして、御息所を見舞いすることもできないまま、時間を過ごしていたが、やはり御息所が自分を薄情者扱いしておしまいになることを不憫に思い、また世間からも無情な人として見られることを不本意として野宮の御息所を訪ねる。しかし、その源氏の出で立ちも、「思しおこして」と、気持を奮い立たせたものであった。

源氏は御息所を「いとほし」く思うことと、「情」というものを意識して、訪れようとする気持を発動させていたが、それは愛情という面からは程遠いものであった。というよりも、御息所に対する源氏の姿勢は一貫して「いとほし」と「情」という感情に基づかれている。生霊事件以後、源氏の御息所との関係は、この源氏による「いとほし」と「情」によって支えられていたといえるほど、頻繁に用いられ、またこの二つの語は、よく連動して表現されている。

勿論、源氏の「情」ある態度そのものは、御息所に限られて発せられるものではなかった。

御文、常よりもこまやかなるは、思しなびくばかりなれど、またうち返し定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし。男は、さしも思さぬことをだに、情のためにはよく言ひつづけたまふべかめれば、ましておしなべての列には思ひ聞こえたまはざりし御仲の、かくて背きたまひなんとするを、口惜しうもいとほしうも思しなやむべし。(賢木・90)

伊勢下向の日が差し迫り、源氏日消息文はいろいろ心を尽くしているが、それは源氏の「情」ある態度を基盤とするものである。実はこうした源氏の態度には、「中将・中務やうの人々にはほどほどにつけつつ情を見えたまふ(濔標・284)」のように、御息所だけに

かぎらず、常に女性に対するときの源氏のあり方であった。勿論、源氏の対女性関係における「情」ある心遣いにも、相手によってそれぞれ違う。例えば、末摘花の場合、源氏の思いやりは、「はかなきほどの御情ばかり（蓬生・326）」だったり、「情棄てぬ御心（玉鬘・139）」だったりするが、それをうけとめる末摘花側にとっては、「大空の星の光を盥の水に映したる（蓬生・326）」ようなものであった。ただ、御息所の場合は、源氏は「情」あるべきあり方として御息所に臨むことを意識的に喚起し、そのことが繰り返される点において他の女性とは違っている。また、源氏の「情」ある態度を受け止める御息所の姿勢にも違いが認められる。

四 「情」を知る御息所

物語に描かれる御息所は、優れた教養の持ち主で、その心深く油断のできないきちんとしたあり方やもったいぶった態度は、源氏が心を許して近寄りにくくする要因の一つでもあった。こうした御息所は常に人の目を気にしていながら、源氏に対して「情」あるべく心がけていた人物であったことが、次の記事からわかる。

北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて、御消息聞こえたまふに遊びはみなやめて、心にくきはひあまた聞こゆ。何くれの人づての御消息ばかりにて、みづからは対面したまふべきさまにもあらねば、いとものしと思して、「かやうの歩きも、今はつきなきほどになりてはべるを思ほし知らば、かう、注連の外にはもてなしたまはで、いぶせうはべることをもあきらめはべりにしがな」と、まめやかに聞こえたまへば、人々、「げに、いとかたはらいたう、立ちわづらはせたまふに、いとほしう」などあつかひきこゆれば、いさや、ここの人目も見苦しう、かの思さむことも若々しう、出でぬんが今さらにつつましきこと、と思すにいとものうけれど、情なうもてなさらむにもたけからねば、とかくうち嘆きやすらひてみざり出でたまへる御けはひいと心にくし。（賢木・87）

これは、野宮を訪れた源氏の対応に苦心する御息所の心境である。葵上の死後、世間では御息所が源氏の正妻になるかもしれないと噂されていた。内心そのことを期待していた御息所は、その後の源氏の冷たい態度から、そうした可能性が残されていないことを思い知る。すると、いままで悩み続けてきた源氏への気持にも整理がつき、伊勢下向を執行することになる。もはや伊勢下向も決り、源氏の心も離れていたことを認めた以上、源氏に会うことは意味がないとする御息所ではあるが、ここまでやってきた源氏を冷たくもてなすこともできず会ってしまう。御息所はそれを源氏に対する「情」ある行為としている。これは御息所と

いう女性が、源氏に劣らないほど「情」というものを意識し、そうしたあり方を重視していたからであろう。

こうして御息所自身は、源氏との関係において「情」というものを意識して対応しているので、源氏が自分に対して「情」を尽くしてくれていることもわかっている。しかし、それが源氏の自分を深く思う心から発生しているものではないことをも気づいている。

まことや、かの齋宮もかはりたまひにしかば、御息所のばりたまひて後、変らぬさまに何ごととぶらひきこえたまふことは、ありがたきまで情を尽くしたまへど、昔だにつれなかりし御心ばへのなかなかならむなごりは見じ、と思ひ放ちたまへれば、渡りたまひなどすることはことになし。あながちに動かしきこえたまひても、わが心ながら知りたく、とかくかかづらはむ御歩きなども、ところせう思しなりにたれば、強ひたるさまにもおはせず。齋宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思ひきこえたまふ。(濬標・309)

源氏は伊勢から京に戻ってきた御息所を以前と変わらずに扱っているが、しかし、それは源氏の深く心の籠もった情愛からではなかった。御息所はそうした源氏の思いやりのある態度に感謝していながらも、一方では深く傷付いていたのである。相手との関係において「情」ある態度で臨んでいる源氏は、当代の理想的な男性としての面貌を十分発揮しているし、御息所もそれは認めている。

『枕草子』では、男女を問わず、情ある態度をとることが望ましい姿と認めて、次のように述べている。

よろづのことよりも、情あるこそ、男はさらなり、女もめでたくおほゆれ。なげの言葉なれど、せちに心に深く入らねど、いとほしきことをば、「いとほし」とも、あはれなるをば、「げに、いかに思ふらん」など言ひけるを、伝へ聞きたるは、さし向ひて言ふよりもうれし。

(第254段・195) 12)

ここの記事に照らし合わせてみると、源氏と御息所は思いやりを持って相手の感情を損なわずに応じている、当代の教養ある理想的な男女であるといえる。とりわけ、源氏の持つ「情」ある態度は、一夫多妻制の当時には男性として持つべき理想的なあり方として受け取られる。源氏は御息所に対して自分なりに精一杯に努めたといえるが、源氏の「情」ある態度とは裏腹に、御息所の感じ取っているのは源氏の真情の籠もっていない形だけの心であり、それを御息所は「つれなかりし御心ばへ」と受け止めていた。自らの身分地位を高く自負する強い自意識の持ち主であった御息所にとっては、そうした源氏の心づかいに満足するはずはない。御息所自身、大臣の娘として元東宮妃であったことへの高い誇りを持

12) 本文は、増田繁夫校注(『枕草子』和泉書院・1987)による

てば持つほど、自分の身の上に相応しく待遇してもらえないことが堪えられない苦痛であったに違いない。つまり、一夫多妻制の当時としては、源氏の御息所への「情」ある態度は、理想的なあり方であったことには間違いないが、当の本人である御息所には、源氏の態度を単に喜ばしくありがたきものとして受け止めることはできなかった。というのは、御息所にとって源氏は、単なる男女関係としてではなく、御息所の社会的な地位を決定づけてくれる存在として重要な意味を持っている。そうした源氏が御息所に対して真情の籠もっていない形式的な態度を取っている。源氏との関係を通して自己の社会的な立地を固めようとした御息所の期待は、深い嘆きと挫折感に化するわけである。

五 おわりに

源氏物語の六条御息所は、元東宮妃という高い地位に位置していた女性として、源氏とかかわる女性の中でも、身分や教養、容姿にすぐれた存在である。しかし、そうした上品で優雅な御息所は、もののけとなって人に取りつくようになる。このような御息所に対し、源氏は常に「いとほし」と同情の眼差しを向け、その対応においては「情」をかかせまいとしている。源氏の御息所を「いとほし」と思う心には、元東宮妃という誇り高い御息所に相応しく待遇してあげられない源氏の御息所への精神的な負い目とその根底にある。さらにこうした感情が常に源氏にして「情」ある態度を意識上にのぼらせることへと繋がっていく。このように、御息所との二人の関係は、源氏の「いとほし」さを感じる心や「情」を知る理想的なあり方によって支えられていたといえる。ただ、源氏の「情」ある態度が、いくら当時の理想的なあり方としてであろうとも、その背後にある自分に対する冷たさが御息所には耐えられない苦痛であった。なぜなら、御息所にとって源氏との関係は、男女の愛情を問題にする以上に、御息所の社会的な位置を決定づけるものとして重要な意味を持ち、それが御息所の存在意味に深く関わっていたからである。源氏の「情」ある態度を単に理想的なあり方として受け止められない御息所を描き出した所以がそこにある。

【参考文献】

- 増田繁夫校注（『枕草子』和泉書院・1987）
新編古典文学全集（『源氏物語』小学館・1995）
源氏物語古注釈大成6（『河海抄』日本図書センター）
大野晋／佐竹昭広／前田金五郎編（『岩波古語辞典』岩波書店・1974）
池田節子「いとほし」（『王朝語辞典』東京大学出版会・2001）
野村精一「源氏物語の人間像・I 六条御息所」（『源氏物語の創造』桜楓社・1969）
大野晋「いとしい」（『日本語の年輪』新潮文庫・1969）
鈴木日出男「車争い前後の六条御息所—『源氏物語』表言論覚書—」（成城文芸91・1980）
熊谷義隆「六条御息所の生霊について—その発生を中心に—」（『山形女子短期大学紀要』18・1986）
藤本勝義（『源氏物語の〈物の怪〉』笠間書院・1995）
増田繁夫「葵巻の六条御息所」（『人物造型からみた源氏物語』至文堂・1998）
鈴木日出男「心情語「いとほし」「心苦し」」（『源氏物語の文章表現』至文堂・1998）
大野晋「なさけ」（『日本語の水脈』新潮文庫・2003）

要 旨

源氏の御息所との関係は、物語の出発からしてすでに他の女性たちとは違う側面をもっていた。というよりも、物語は最初からこの二人の愛情のゆくえといったものが関心事ではなかった。それは御息所の伊勢下向への意志が源氏の待遇に関わると認識していた桐壺院の源氏に対する訓戒からも明らかである。父大臣や皇太子の死によって、御息所はすでに社会的基盤を失ってしまい、いまや御息所をこの世に繋げるものは、源氏との関係のみである。したがって、御息所にとって源氏との関係は、男女の愛情を問題にする以上に、御息所の社会的な位置を決定づけるものとして重要な意味を持っている。御息所がそれを強く意識すればするほど、源氏もそうした御息所が心の負担となっていったのであろう。御息所に対する源氏の「いとほし」は、ただ単に弱者や劣者への同情心からというより、源氏の御息所に対する精神的負担がその心理の根底にあると同時に、御息所の高い身分を意識したことによる。それは言うまでもなく、御息所にとっての社会的基盤の獲得が、どれほど切実で大きい意味を持つものであったのかを言い表している。さらに、源氏は御息所との関係において「情」というものを意識的に喚起し、物語ではそのことを繰り返し描いている。それは、単に源氏の女性関係における理想的なあり方を際立たせるために描いているのではない。それを受け止める御息所に注意すると、御息所は源氏の「情」ある態度の背後に存在する冷たい心を感じ取り、深い挫折感を味わっている。これは一夫多妻の時代に男性の理想的なあり方として認められていた「情」ある姿勢も、女性の立場からすると、ただ単に理想性としては片付けられないものがあることを意味し、物語ではそれを御息所のように自意識の強い女性を通して言い表しているのである。

キーワード：いとほし、情、体面、身分意識、形式的、自意識

투 고 : 2010. 2. 28

1차 심사 : 2010. 3. 13

2차 심사 : 2010. 3. 27